

第二回統計表解

723



114
A 4371



第二回 統計寮年表解

例言

一明治六年以来本寮製為スル所ノ諸表ハ去年
 既ニ第一回統計表ノ編集アリ今茲ニ其八年
 間製スル所ノ諸表ヲ整理シ名ツケテ第二回
 統計寮年表ト云フ去年始メテ統計表ヲ編纂
 スル事尚創新ニ屬スルヲ以テ材料未タ集マ
 ラス其製作スル所ノ諸表概皆得ルニ随ヒ計
 出シ成ルニ随ヒ謄録スルモノニシテ次序紛
 雜体裁未タ宜シキヲ得ス今次材料ノ稍々整

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

大隈侯爵邸寄贈

備スルヲ以テ每表部ヲ分テ別掲シ他日類集
條疏ノ地ヲ為スト雖氏亦未^決テ未夕完悉ナル
ヲ得サルノミ

一每部表ヲ逐テ下ス所ノ注釋ハ首トシテ其表
ノ出所年月及其條款ノ解シ難キモノヲ解訖
シ間ニ表中ノ事蹟ヲ擧ケテ論明スルモノア
リト雖氏之ヲ要スルニ統計ノ表ハ其用固ヨ
リ一ナラス而シテ之カ注釋ヲ下スモノ若シ
或ハ偏倚スル所アレハ以テ其一ニ用フヘク
シテ而シテ其二ニ用フ可カラサルニ至ル故

ニ其事蹟ヲ論スルカ如キハ特ニ其表ニ於テ
欽ク可カラサルモノト原ト之ヲ製スル者ニ
非レハ隱伏見難キモノト止マリ其餘ハ一
ニ觀者自カラ見解ヲ下スニ任ス又物産段
別諸表ノ如キ其段ノ尚疑フハキハ或ハ論說
ノ著クヘキモノアルモ總テ之ヲ闕如ス
一每表用フル所ノ年月其原材ヲ得ルノ遲速ア
ルニ從ヒ一ナラス故ニ各表題號ノ下必ラス
其年月ヲ附録スト雖氏例ヘハ人口反別相比
較スルカ如キニ類以上ノ事ヲ一表ニ合作ス

ル片ハ必ラス其表主トスル所ノモノ、年月
ヲ以テ題號ノ下ニ掲ク故ニ其餘ノ年月ハ各
其本部ノ表下ニ就テ之ヲ觀ルヘシ

一内外貨幣其時價ノ知ルヘキモノハ皆時價ニ
據リ算出スト雖氏時價ノ知ルヘカラサルモ
ノハ英貨一磅ハ我四圓八拾八錢佛貨一フ
ラシクハ拾九錢三厘五毛米銀一弗ハ壹圓三厘
壹毛墨銀一弗ハ壹圓壹錢ヲ以テ之ヲ算ス表
中洋銀ト稱スルモノハ皆墨貨ナリ

一府縣ノ數年々一ナラス之ヲ改メテ本年ノ數

ニ合スル固ヨリ難シトセサレ氏將來明年又分合
アレハ終ニ徒勞ニ属スルヲ以テ一ニ其舊ヲ
存シ每表或ハ不同アルヲ顧ミス但、其二種
ノ表相比較スルカ如キハ或ハ甲年度ノ制ヲ
改メテ乙年度ノ制ニ合スルモノアリ

明治九年九月

人口

此ニ載スル所ノ諸表ハ明治六年一月戸籍寮
調査前年十二月戸口ノ現数トス

是時ニヨテ全國管轄分テ一使二府一藩六十

七縣ト為シ國數八十五外ニ樺太郡數七百十六町

數一萬二千五百五十八村數七万二千二十九

ニシテ其他寺社數及戸數ハ第一及第二表中

掲クル所ノ如シ

全國人口ヲ戸數ニ配スルハ一戸凡ソ四人六

九トス

前年ノ間

五年一月ヨリ
同十二月マテ

全國生兒ノ數男兒二

十九万八百三十六人女兒二十七万八千九

十八人ニシテ二十女兒コトニ二十男兒九。

ハアリ又同年内死亡ノ數男子二十万八千九

十二人女子十九万七千三百十二人アリテ之

ヲ右男女生兒ノ數ヨリ減スレハ是歲人口ノ

増息十六万三千六百三十人即チ人口百ニシ

テ生息〇四九ノ比例ニ在ナ

按スルニ本文人
口増息ノ數十六

万三千六百三十人ヲ此年總人口ノ數ヨリ減

シ之ヲ前年ノ數ニ照スニ尚多キコトニ万六

千二百二十人アリ此中皇族三十一人ヲ除キ

其餘ハ蓋シ五年二月以後六年一月ニ至ル迄

無籍男女ノ漸次就藉セシ又此生兒ノ數ヲ取

モノアルニ由ルナリテ之ヲ前年ノ人口ニ比スレハ凡ソ五十八

人ニシテ生兒一人アリ死亡ハ八十一人六

ニシテ死者一人アリ然レモ右ニ死亡ノ數ハ之

ヲ全國ノ人口ニ比スルニ共ニ甚タ寡ナシ

諸藩ノ男女多寡ノ比例女子ノ男子ヨリ多キ

モノ京都府 大坂府 琉球 新潟 埼玉

椽木 堺 度會 愛知 山梨 滋賀 敦賀

足羽 相川 白川 通計十五縣ニシテ其餘

ハ皆男子多シ又之ヲ國別スルニ女子ノ多ニ

居ルモノ山城 和泉 伊勢 志摩 尾張
 三河 安房 近江 若狹 越前 越後
 佐渡 丹後 肥後 琉球 樺太 通計十六
 國而シテ男子ノ多ニ居ルモノ七十個國ナリ
 又之ヲ全國ニ通算スルニ男子百人ニシテ女
 子九十七人一四ニ在リ
 我邦ノ面積近時未タ實測スルモノアラス其
 方里數注々諸書ニ散見スト雖モ皆其精確ヲ
 保シ難シ今姑ラク地誌提要ノ載スル所ニ隨
 ヒ之ヲ算スルニ每一方里人口大抵左ノ如シ

	人口	面積	每一方里	每一英方里
全國	三三,三〇〇,六七五	二二,七四〇	一四〇・二	二三五
四國	二六,二四七・二五	一,一七五	二一〇・二	三五一
九州	四九,九六九・四一	二,四五七	二三四	三四〇
本島及佐渡 隱岐東海諸島	二五,三八八・五五二	一四,五九二	一七五・一	二九三
琉球	一六,六七八・九	四四六	三七四	六三
北海道	一,二三六・六八	五,〇七五	二四	四

北海道ノ条下面積ニハ樺太ヲ除キ人口中ニ
 ハ之ヲ加フ而シテ是歳樺太ノ人口ニ千三百
 五十人アリ然レモ其數固ヨリ計フルニ足
 ラス且ツ樺太交換ノ後其民多クハ北海道ニ
 移ルヲ以テ今
 之ヲ除カス

大歳省

第三表ハ第一第二總表ノ中ヨリ更ニ其年齡ヲ區分シ表出ス然レモ表中年齡未詳ノモノ長崎縣ニ於テ男七百九拾七人女九百六十人アリ開拓使ニ於テ樺太人負男千百五拾五人女千二百三人アリ是ヲ以テ其各項年別ノ數表首ノ合數ト吻合セス

表中年齡ニ隨テ男女ノ多ク少ク別ツトキハ四十歳以下ハ男子多ク居リ四十歳以上ハ女子男子ヨリ多シ其比例即チ左ニ掲クル所ノ如シ

年齢	男子	女子	百分比
十四以下	四七五四九三一	四六三〇〇四一	男子百人 女子九十七人
十五以上	七〇三〇八二一	六六二三九〇〇	男子百人 女子九十四人
四十以上	五〇三二八四〇	五〇四一九七二	男子百人 女子九十九人
八十以上	七一八八四	一一〇八七〇	男子百人 女子六十四人

又同表中各年齢男女合數ヲ取テ之ヲ明治五年調査ノ年別ト比較スルニ其増減尤ノ如シ

年齢	明治五年	明治六年	増減
十四以下	九〇五六三〇五	九三八四九七二	増 三二八六六七

十五以上	一三、六七三、八六一	一三、六五四、七二一	減	一九、一四〇。
四十以上	一〇、一八二、一四七	一〇、七四八、二二	減	一〇、七三三五
八十以上	一九四、七七八	一八二、五四	減	一、七二四
右増減ノ數	十四歳以下ハ増百分、三、五ニ在リ	十五歳以上ハ減百分ノ、一四ニ在リ	四十歳以上ハ減百分ノ、一強ニ在リ	八十歳以上ハ減百分ノ、六、五ニ在リ
是レ固ヨリ生死ヲ乗除スルノ餘數ニシテ是ヲ以テ直キニ死亡ノ比例ト為スヲ得スト雖氏亦以テ老幼消長ノ大勢ヲ觀ルヘシ又假リニ同年生兒ノ總數五十				

六万九千三拾四人ノ中ヨリ十四歳以下ノ増數三拾二万八千六百六十七人ヲ減シテ其餘二十四万三百六十七人ヲ同年十四歳以下死亡ノ數ト為シ之ヲ生兒ノ總數ニ比スレハ生兒百人ニシテ死亡四十二人アリ又之ヲ十四歳以下ノ總數ニ比スレハ人口百人ニシテ死亡二十五人六ニ在リ				
第四表ハ又全國人口ヲ其種族ニ隨テ算出ス表中旧神官ト称スル者ハ五年五月旧時ノ神官其職ヲ解カレテ後其籍未タ定マラサル者				

ニシテ此一項及僧尼ノ如キ宜シク之ヲ称シ
テ族ト云フ可カラサルニ似タレ氏蓋シ当時
ノ形勢ニ在テハ又之ヲ職業ト称シクタクキ者
アリ且ツ戶籍寮ノ原簿之ヲ族別中ニ編入ス
ルヲ以テ此表モ亦姑ラク之ニ從フ且ツ明治
六年ニ當テハ表中族別ノ外尚卒ノ一族アリ
然レ氏其後卒族ハ悉皆士籍ニ編入スルヲ以
テ今之ヲ士族ノ中ニ合算ス又本表載スル所
ノ外皇族男十四人女十七人アリ
表ニ據テ之ヲ按スルニ平民ノ數三千百拾万

九千八百九十四人其他諸族ノ合數二百拾八
万八千三百九十二人ニシテ其比例大凡一ト
十五トノ如シ又全國總人口ノ中平民ハ其百
分ノ九三四ニ在リ華族ハ其〇〇八四ニ
在リ士族ハ其〇一六八ニ在リ神官ハ其〇二二
ニ在リ僧尼合シテ其〇六五ニ在リ

第五表ハ再ヒ全國人口ヲ其職分ニ隨テ類別
シ各營業人ノ家族及老幼癯疾囚徒其他華士
族ノ定業ナキモノヲ收メ之ヲ表末無業ノ部
ニ舉ク然レ氏此表ハ其各種營業ノ類別及毎

業多寡ノ比例等ニ於テ疑ヲ容ルヘキモノ甚
々多シ唯其成數アルヲ以テ姑ラク此ニ掲出
スルノモ又右諸表ノ外別ニ罪囚癡疾等ノ一
表アリト雖モ本年ハ之ヲ載セス

文學

本表ハ明治六年文部省第一回年報ニ據リ製
為スル所ニシテ其第一表ハ全國學事ノ大勢
ヲ舉示シ第二表ハ第一表ノ中ニ就テ大中小
學區ノ定數凡設校數教員生徒等專ラ學事ニ
係ルモノヲ抜テ其詳ヲ示シ第三表ハ又第一
表ノ中其出納會計及其地設備ノ資本等其經
費ニ係ルモノヲ舉ケテ以テ一歳ノ學費ヲ詳
示ス第一表中現設小學校一万二千六百四十
二中學二十外國語學十九總計壹万二千六百

八十一ニシテ之ヲ第二表ノ總計ニ比スルニ
四校ヲ多クス是中學校ニシテ傍ラ外國語學
校ヲ兼ムル者アリ又外國語學校ニシテ中學
ヲ兼ヌル者アリテ一校兩出スルモノアルニ
由ルナリ而ノ此等ノ校ニ於テハ其教員モ亦
ニ職相兼ヌルモノアリ今其二類相兼ヌルモ
ノハ第二表中符號ヲ付シテ之ヲ分チ表底各
之ヲ注釋ス

學校ニ三種アリ曰ク官立公立私立官立ハ官
ノ設クル所ニ係リ公立ハ地方人民ノ共立ス
ル所ノ者私立ハ人民一己ノ私立スル者ナリ
而ノ官立ハ其制度他ノ二類ノ者ト同シカラ
ス是ヲ以テ表中之ヲ掲ケス別ニ第三表ノ後
小表ヲ製シテ其數ヲ擧ク又是歲諸縣ノ中學
事ノ申報ニモ六アリ其縣ハ特ニ學區ノ
數ノミヲ掲ケ其餘一切之ヲ洩ラス

官校表中大坂宮城師範學校教員ノ數ヲ掲ケ
サルモノハ此兩校ハ東京師範學校生徒ノ卒
業スル者ヲ以テ之ニ充ツルニ由リ其數一定
シカタキヲ以テナリ

是歲諸縣ノ申報學齡兒女ノ數ヲ欲ク者二十
七縣是ヲ以テ表中其就不就ノ比例ヲ舉クル
一能ハス代フルニ每人人口百人ノ比例ヲ以テ
スレト今其申報アル諸縣ニ就テ之ヲ通算ス
ルニ學齡每三人一七ニシテ就學一人ノ比例
ニ在リ

又是歲學時各種ノ歲入合シテ百九十三万九
千九十八圓三十四錢之ヲ百分ニ率スルニ就
學生徒ノ自カラ出スモノ其六二八九人民ノ
鬻納ニ係ルモノ九一。八賦課徵募ニ係ル者

四三二三官カヲ仰クモノ一六六一諸金利子
其他收入一八七六ノ比例ナリ

紙幣

明治元年始メテ太政官札ヲ製造シ同年五月
 十五日ヨリ全國ニ令シテ之ヲ行フ是時製造
 ノ總額四千八百万圓ニシテ同年ノ末ニ至ル
 迄其出額通計二千三百八拾壹万九千九百八
 拾七圓五拾錢アリ翌二年五月ニ至リ發行ノ
 數ヲ限リテ三千二百五拾万圓ニ上ラサラシ
 ム而シテ三千二百五拾万圓中ニ孰シ其千三
 百万圓ハ戊辰年間諸藩石高ニ應シ貸出スル
 所ニシテ方今石高拜借ト唱フルモノ又其千

四百五十拾万圓ハ前年以來ノ國用ニシテ其餘
五百萬圓ハ同年納税ノ期ニ至ルマテ残シテ
準備ニ為スモノナリ然レモ是歲國用再ニ給
カスシテ發行スルモノ前ノ五百萬圓ト併セ
テ九百二十五萬二千七百六十四圓餘又石高
拜借其他ノ為ノ更ニ貸出スルモノ千百二十
四萬七千二百三十五圓餘アリ之ヲ前年ノ發
行額ニ加フルニ恰カモ四千八百萬圓ノ數ト
合ス又是歲九月太政官札ノ小札ニ之シク僻
地融通ニ苦シムヲ以テ新夕ニ民部省札ノ製

造アリ其數合シテ七百五十萬圓其逐次發行
スルモノ明治三年中五百三十萬四千五百
拾壹圓同四年ノ間二百拾二萬五千六百八十
三圓同五年壹萬九千七百四圓初ノ此楮幣ハ
廷議別ニ之ヲ發行セス太政官札ノ中ニ就テ
大小相交換スルニ在リ然レモ其收還スル所
ノ太政官札ハ僅ニ三百九拾二萬九百七十六
圓餘ニシテ其餘ハ亦皆國用ノ之ヲ補フモノ
ナリ且ツ後日新楮幣ノ成ルニ及テ既ニ換
セシ三百九拾餘萬圓ノ數ヲ照シテ新鈔ヲ再

出セシニ因リ民部省札ハ終ニ一種ノ別鈔ト
為リタリ尋テ四年十月新貨ノ未タ全國ニ行
ハレタリ世人旧貨幣ヲ厭惡シ融通壅塞スルヲ
以テ官又三井組ニ命シ古貳合金ヲ抵当トシ
テ正金兌換證券ヲ製シ翌年ニ至ルマテ逐次
発行スルモノ六百八拾万圓加フルニ同年ノ
間開拓使亦兌換證券ヲ發行シテ其數二百五
十萬圓アリ此證券ハ明治十四年十一月ヲ限
リ該使ノ償完スヘキ所ノ者トス
既ニシテ楮幣ノ製造粗惡ナルヲ以テ注々壞
敗磨滅シ贋造ノ弊亦随テ生ス是ニ於テ四年

十二月遂ニ日耳曼國ニ托シテ新タニ精巧ノ
楮幣ヲ製造シ五年六月ヨリ漸次之ヲ行フル
後旧來諸鈔ノ之ト交換收入スルモノ明治八
年六月ニ至ル迄太政官札三千四百拾二萬
二千百壹圓民部省札三百七拾壹万八千七百
圓大藏省兌換証券六百四拾万八千三百三拾
五圓開拓使同百九拾七万八千八百四拾五圓
ノ六年三月金札引換公債證書ト名ソクルモ
ヲ發シテ楮幣ヲ轉シテ公債ト為スノ法ヲ
設ケ其証券附スルニ年六朱ノ利子ヲ以テシ

人民ノ之ヲ好ムモノハ皆官ニ請ヒ楮幣ト相
交換セシム是ニ由テ各種楮幣ノ支消ニ属ス
レモ 太政官札二百五万二千七百四十四圓
民部省札拾八万五千八百五圓ニシテ別ニ開
拓^使兌換証券ノ故アリテ新田交換ノ外大蔵首
ニ納ムルモノ三拾六万六千六百六拾圓アリ
又右四鈔ノ損敗シテ官ニ收ムルモノ九百圓
是等ヲ合シテ明治八年六月三十日右四鈔ノ
世ニ行ハル、モノ第一表掲クル所ノ如シ
旧諸藩并旗下発行スル所ノ楮幣ハ戊辰ノ後

暫ラク旧ニ依テ流通セシノ后千明治二年十
二月ニ至テ始メテ新タニ其數ヲ增益スル
ヲ禁シ且各地流通ノ數ヲ調査シテ之ヲ報上
セシム然レ氏此時調査ノ數額ハ今日詳ラカ
ナラス且ツ尔後諸藩尚増製発行スルモノ多
シ后千明治四年廢藩置縣ノ際遂ニ諸藩蔵ス
ル所ノ未發行用紙并器械ノ類悉皆官ニ沒收
シテ平東京大坂兩地ニ於テ之ヲ燒棄ス是時
又新タニ各縣ニ令ニ其流通ノ數ヲ査セシム
是ヨリ先キ各藩楮幣每地各々流通相場アリ

テ到處其價ヲ一ニセス加フルニ價格時々ノ
昇降アリテ極メテ日用ニ便ナラス是ヲ以テ
四年七月諸縣ニ令シテ其月十四日、相場ヲ
取テ永ク其定價ト為サシム尋テ同年十二月
新鑄銅貨ノ價位定ミルニ及テ又之ヲ新貨ニ
折算ス今此價位ヲ以テ是歲新查ノ數ヲ算ス
レハ二千四百二十拾八万四千七百八圓四拾四
錢アリ然レモ此額中新貨ノ價未タ定マラサ
ルノ前貢租等ノ事ニ於テ既テニ諸縣ヨリ納
附スル所ノ藩札若干圓アリ新貨比較ノ價格

ヲ以テ之ヲ算スレハ右ノ外更ニ二十七万九
千九百二十四圓五拾錢許ヲ多クス且ツ此時
ノ申報ハ其數未タ精確ナラス爾來更ニ精算
シテ遞次増加スル所ノ者三十四万三千三百
五拾五圓アリ此三項ヲ合シテ則チ表中載ス
ル所ノ製造高トス后チ新鈔ノ出ツルニ及テ
從來ノ藩札ハ宜シク悉ク交換スヘキモノナ
リト雖モ其中小札殊ニ多クシテ新鈔ハ十錢
ニ下ルモノナク僻陬或ハ壅塞ニ苦シムル處
リ五錢以下ノ小札ハ新タニ官印ヲ押シテ姑

ラク旧ニ依テ通用セシメ其餘悉ク新鈔ト交
 換ス是ヨリ八年六月ニ至ルマテ新旧ノ交換
 一千餘万圓其他旧藩ノ時封内庶民ト貸出セ
 ルモノアリテ其漸次還入スルモノ八十八万
 餘圓其壞裂散失シテ遂ニ還入セサルモノ百
 餘万圓アリ故ニ現今尚存スル所ノ紙鈔ハ悉
 皆五錢以下ノ小札ニシテ其數表上掲クル所
 ノ如シト雖モ蓋シ之ヲ實際ニ照サハ必テス
 過カニ其額數ノ内ニ在ルヘシ
 新楮幣ハ(第二表)当初製造スル所ノ摠額一億

三百五拾三万七千三百五拾三圓ニシテ其中
 右ノ諸鈔ニ對シテ交換スルモノ、外明治五
 年八月中開拓使用度ノ欠耗ヲ以テ貸出セシ
 モノ百拾万圓該使ヨリ他貨幣ヲ以テ逐次償
 完スヘキモノニシテ其八年六
 月ニテ償了スル所ノ數ハ前ニ記セシ
 三十一万六千六百六十圓即チコレナリ五年
 十月ヨリ六年四月ニテ逐次出納寮ニ交附シ
 テ國幣ノ欠ヲ補ヒシモノ八百万圓大坂神戸
 及西京為換會社ノ顛覆ヲ救フテ給與スルモ
 ノ五拾二万五千四百四拾四圓餘アリ(第一表
 ト参考)此數件ノ合計即チ第二表題シテ流通

高ト曰フモノニシテ又之ヲ右諸鈔ノ殘額ト
合シ九千四百八拾万三千八百拾九圓二十四
錢六厘ヲ現今全國楮幣流通ノ總額トス
新鈔流通ノ總額ハ右ノ如シト雖モ紙幣寮拂
出ノ數ハ此ニ止マラス表中載スル所ノ如ク
尚別ニ數件ノ故アリテ(其中各處渡シ交換未
濟ト稱スルモノハ諸札及損札交換ノ為メ各
府縣等ニ交附シテ備置セシムルモノナリ)明
治八年七月一日紙幣寮拂出總數并其殘高表
中記スル所ノ如シ而シテ表底載スル所ノ五

拾四方餘圓ハ即チ諸損敗札類ノ還入ニシテ現
時紙幣寮中ニ在ルモノニシテ即チ第八第十
二第十十三ノ三行ヲ合スル數ナリ
^{此諸表中}第五第四表ハ七表ノ中ヨリ抜キ來テ其兩年
増減ノ比較ヲ示スモノ強テ解説ヲ要セス第
五表ハ第一表中金札引替公債證書發行ノ委
曲ヲ示スモノニシテ初メ官議ハ此證書ヲ以
テ獨リ太政官札及民部省札ノ二鈔ト交換セ
ントス然レモ新鈔或ハ貨幣ヲ以テ交換ヲ請
フモノアレハ官之ヲ納受シテ更ラニ彼二鈔

二交換スレハ始メヨリ二鈔ニ交換スルト其
 理相異ナルヲナシ是ヲ以テ其請フ所ヲ聽ル
 シテ證書ヲ下附スルモノ若干アリ是レ第
 表ノ甲第中新楮幣及貨幣ノ二格ナル所以ニ
 シテ乙第表ハ又此二幣ヲ前ノ二鈔ト相交換
 スルノ詳ヲ示スモノナリ故ニ甲表中新紙幣
 及貨幣ノ二格ノ統計ハ即チ乙表中上納高ト
 題スルモノト併合又乙表中合計ト題スル
 項ヲ甲表中ノ太政官民部^省ニ統計ト相加ス
 其數第一表中金札引換公債證書ト題ス

此者、數ト相吻合ス
 初貨幣及新楮幣ノ請入高ト稱スル者ハ當
 所ノ如クニシテ是レ直チニ下ノ二鈔ト交換
 スヘキ者ナルヲ蓋シ出納ノ便宜ニ換リ上納
 貨幣ノ中一旦新紙幣ト交換シ而後又之ヲ以
 テ二鈔ト交換スルモノ五十七萬圓アリ故ニ
 貨幣格内新紙幣ト交換ノ一項ヲ設ケ之ヲ新
 紙幣ノ格ニ移スモノニシテ其實ハ最初上納
 額數ノ中貨幣ハ五十七萬圓ヲ減シ新紙幣ハ
 五十七萬圓ヲ多クスルモノト
 看做シテ其理異ナルコトナシ

貨幣

貨幣諸表ハ明治三年十一月以來同八年六月
 二至ル迄大坂造幣寮貨幣鑄造ノ總數ヲ舉ル
 モノニシテ其第一表ハ三幣鑄造ノ總數ヲ舉
 ケ第二表ハ其官私地金ノ輸入ヲ舉ケ第三表
 ハ金銀二幣純分ノ公差ヲ舉ケ第四表ハ銀貨
 ノ定量及其模様中コ口變革アルヲ以テ壹圓
 銀以下每種其類ヲ分テ之ヲ掲ケ原量貨幣ト
 改正貨幣ト各々其發何ニ在ルヲ知ラシメ又
 第五表ハ該寮製造スル所ノ硫破ヲ表出ス而

シテ第六回銅貨表第七全國運用貨幣表ハ類
ヲ以テ此ニ附記スルモノナリ

第一表中鑄造高ノ中ヨリ分析供試ノ高ヲ除
キ発行貨幣ノ高六千六百二十七万九千九圓
ヲ即チ明治八年六月三十一日迄發行スル所
ノ貨幣ノ數トス而シテ其第四格及第五格ハ
成貨秤量ノ公差ヲ舉クルモノニシテ純分公
差ト異ナリ第三表參考每貨其定量アリト雖
氏其鑄造ノ際固ヨリ小差異ナキコト能ハス
故ニ第四格中每種貨幣ノ定量第三格ノ圓數

ニ当ルモノヲ舉ケテ之ヲ第三格ノ實量ニ照
シ其實量ノ多キモノハ之ヲ第五格中過ノ部
ニ舉ケ其少ナキモノハ不足ノ部ニ舉ケ且ツ
各合計ノ下其過不足ヲ加減シテ其殘數ヲ舉
ク

第二表造幣寮輸入スル所ノ地金ハ注々鑄造
ノ用ニ中ラスシテ之ヲ返還スルモノアリ表
中載スル所ハ其返戻セシモノヲ引去リ獨リ
寮中ニ收ムル所ノ現數ノミヲ舉ク其第二第
三第四格ハ第一表ト異ナラス第五格工業上

損ノ部ト題スルモノハ分析減燒生成溶解減
等其他地金鑄造ノ際生スル所ノ諸般ノ減耗
ヲ曰ヒ益ノ部ト題スルモノハ首トシテ官私
地金鑄造費及不適當返戻地金溶解分析等ノ
諸費ヲ曰フ故ニ此益數ノ中ヨリ損數ヲ減去
スルモノ即チ純粹ノ鑄造手數料ニシテ年々
之ヲ貨幣ニ鑄成シ其寮ノ殖益トシテ官ニ收
ムルヲ例トス

同表中用フル所ノ秤量金銀二貨ハオンスヲ
用ヒ銅ハポンドヲ用フ然レモ其損益ノ比較

ニ至テハ數量精微ニ涉ルヲ以テ銅貨モ亦オ
ンスヲ以テ之ヲ算セリ且ツ八年三月該寮計
算法ノ改正アリテ其以前ハ銅貨年度ノ區分
明知ス可カラズ因テ今其總數ヲ擧ケテ之ヲ
八年上半年ノ中ニ合載ス

第四表各種銀幣ノ中壹圓銀ハ模様ノ改正ア
ルノミニシテ秤量ノ改正ナシ五拾錢以下四
種ノ貨幣ハ中頃量目ノ改正アリト雖モ其實
ハ之ヲ改正スルニ非ス其量ヲ旧ニ復スルモ
ノニシテ初ノ五拾錢以下四幣ハ開業ノ前試

鑄スル所ノモノ各若干圓アリ後チ開寮ノ時
ニ至テ其量ヲ改メテ之ヲ發行シ既ニシテ明
治五年中又模様量目ヲ改メテ其旧ニ復帰ス
是レ表中別ニ開寮以前ノ一項ヲ設クル所以
ナリ又五錢ハ其發行ノ後一タヒ模様ノ改正
アリテ次テ別ニ量目ノ改正アリ是ヲ以テ表
中別ニ模様改正ノ一項ヲ設ク

第六表ハ旧幕府鑄錢座帳簿ノ中偶々旧銅錢
貨鑄造ノ數ヲ得テ表出スルモノニシテ表中
枚數ト称スルモノハ其鑄造ノ枚數ナリ旧價

ト称スルモノハ幕府ノ未其新定スルノ價格

即チ銅錢ハ一枚~~三~~文真鍮錢ハ^{元四}一枚二拾

四文天保錢ハ一枚九十六文文久錢ハ一枚十

六文ヲ以テ算スルモノナリ現價ト称スルモ

ノハ新貨ト比較ノ價位ニシテ銅錢ハ一厘真

鍮ハ二厘天保錢ハ八厘文久錢ハ一厘五毛ヲ

以テ圓數ニ舉クルモノナリ鑄錢ハ其新貨ト

ノ比例当四錢ハ一枚一文錢十六枚ヲ以テ一厘

ニ抵ツト雖モ其一文錢ト当四錢トノ別詳ラ

カナラス依テ暫ラク其數ヲ折半シ旧價及現

價ヲ掲ク銅貨鑄造ノ明和以前ニ在ルモノハ
其數今得テ知ル可カラス新井君美ノ書ニ寛
文中十六年間鑄造スル所銅貨百九十七万貫
アリト云フ是レ蓋シ松平信綱ノ議ニ因リ京
師大佛ヲ鎔毀シテ鑄造スル所ニシテ即チ現
今貨幣其價ヲ算スレハ約百九十七万圓ナリ
而シテ之ヲ表中ノ總計ニ加フレハ其數七百
九十三万九百四拾七圓許トス
第七表ハ明治六年租稅寮ノ帳簿證印稅法ニ
據リ其稅數ヲ得テ貨幣ノ原數ニ溯リ每府縣

管下周歲運用スル所ノ貨幣各幾巨萬ナルヲ
概知スルニ供ス抑内國貿易ノ事ハ統計學中
ノ一大要件ニシテ且ツ其一大至難ナルモノ
之ヲ知ラント欲スル日久シト雖モ我邦ノ今
日ヲ以テ其要略ヲ提挈スルモ尚且ツ得ヘカ
ラス然ルニ帳簿證印稅ハ其記載スヘキ金貨
ノ多シニ隨ヒ賦課スルモノナレハ商農利ニ
敏キノ輩必ラス自カラ剩過ノ金額ヲ報上シ
餘稅ヲ納ル、ノ理ナシ故ニ今此計數ニ據リ
以テ全國貿易ノ大勢ヲ察スル時ハ其各地ノ

貧富及年々貿易ノ盛衰歴然トシテ諸ヲ掌上ニ觀ルカ如ク其確實却テ粗漏ノ貿易表ニ勝ルモノアリ是レ此表ヲ製シテ此ニ附記スル所以ナリ

明治六年ハ本稅徵集ノ初年タルヲ以テ遠陬ノ民猶此法ヲ解セス正シク其規則ニ遵依セサルモノナキヲ保セス是ヲ以テ蓋シ猶幾分ノ脱漏アルヘシト雖氏惟此表ノアクル所ニヨルモ既ニ二十七億圓ノ鉅額ニ至ルトキハ爾後人民悉ク此法ヲ通曉シテイヨク精覈

漏ル所ナキニ至ラハ思フニ其實蓋シ二十億圓ノ上ニ在ルヘシ且ツ帳簿印稅ノ外尚證券印紙ノ規則アリテ其金額又更ラニ幾何ナルヲ知ラスト雖氏本年ハ未タ其精數ヲ得ルヲ以テ之ヲ舉ケス他日計算ノ正ヲ得ルヲ待テ再タテ表出セントス故ニ此表ハ看テ全國運用貨幣ノ總數ト為ス可カラステニ其各地運用多寡ノ比例ヲ見ルヘキノミ

全國中貨幣運用ノ最モ盛ナルモノ大坂第一東京第二西京第三ニシテ東京ハ大坂ノ三分

ノ二六ニ在リ西京ハ大坂ニ比シテ三分ノ一
 ニニ在リ東京ニ比シテ二分ノ一弱ニ在リ諸
 縣ハ總テ三府ニ及ハス今其最モ多キモノ十
 縣ヲ舉ケ其數ニ随テ次第スレハ第一神奈川
 第二長野第三熊谷第四兵庫第五滋賀第六愛知
 第七筑摩第八新潟第九椽木第十千葉ナリ
 然レ氏右舉クル所ハ獨リ其運用貨幣ニ孰テ
 言フモノニシテ其人口ノ多ク亦固ヨリ之ヲ
 影響ヲ為サスンハアラス依テ又更ラニ之ヲ
 人口ニ比較シ順序ヲ立ツレハ尤ノ如シ

第一	大坂	毎一人使用ノ金銭五百九拾四圓
第二	東京	同 三百四拾六圓
第三	西京	同 二百九拾圓
第四	兵庫	同 二百六拾四圓
第五	神奈川	同 百四拾五圓
第六	長野	同 百三拾九圓
第七	椽木	同 百六圓
第八	滋賀	同 八拾五圓
第九	熊谷	同 七拾九圓
第十	埼玉	同 七拾五圓

第十一場

同

七拾四圓

第十二政阜

同

六拾七圓

第十三新潟

同

六拾六圓七

石舉クル所ヲ以テ之ヲ觀ルニ維新以來大坂
 ハ大イニ衰替ニ属スト雖氏尚其全國巨商ノ
 巢窟物貨ノ淵藪タルヲ失ハス東京ハ其金額
 大坂ニ及ハスシテ其帳簿數却テ迥クニ大坂
 ヨリ多シ是レ大坂ハ商價ノ數甚タ多カラズ
 シテ其在ル所ノモノ皆富ニ東京ハ其數甚タ
 多クシテ而ノ概シテ巨商ニ乏シキヲ觀ルヘ

シ其他諸縣ノ如キハ一々詳舉スルニ違アラ
 スト雖氏之ヲ前文舉クル所ノ物産物價諸表
 ト參觀セハ我内國貿易ノ事ニ於テ尚大イニ
 發明スルモノアルヘシ

國債

國債第一表ハ内外新田公債明治八年六月ノ
現況ヲ掲記ス然レモ内債ノ原數ハ未タ精覈
ナラス姑ラク同年會計豫算ノ數ニ據ルヲ以
テ他日尚或ハ出入ナキヲ保セス秩祿公債モ
亦現實府縣ニ下附スルノ數ヲ舉クルヲ以テ
其逐次下附スヘキモノ尚此ニ止マラス其他
八年中宜シク下附スヘクシテ遷延未タ果サ
サルモノアリ七年間既ニ下附シテ本年ニ至
リ故アリテ還納スルモノアリ此類總テ其現

大藏省

出納ノ數ヲ舉ク

從來外債ノ元利及口錢ハ各其地拂濟ノ報告ヲ得テ之ヲ掲クト雖此今之ヲ改メ本省現ニ支出セシ年度ヲ用フ

表中ノ年度六年四月ヲ以テ始メトスルモノハ表中所載ノ公債ノ償却皆是歳以降ニ在ルヲ以テナリ又表中ニ拾五圓以下ト題スルモノハ新旧公債ノ中其數ノ微小ナルヲ以テ證書ヲ下附セス固ト一時償却スヘクシテ故アリテ僅カニ存スルモノヲ別掲セルナリ故ニ

此二項ハ遠カラスシテ消滅ニ属スヘキモノトス又鳥取藩云々ノ一項ハ旧藩ノ時藩士ニ分與ノ賞典祿ヲ抵当トシ金ヲ募リテ藩事ニ用ヒシヲ政府負擔ニテ償辦セシモノニシテ其他債ト例ヲ異ニスルヲ以テ此ニ別記ス内外國債ノ通計ハ表中載スル所ノ如ク四千七百八十九万八千六百八圓八拾二錢九厘ニシテ之ニ紙幣流通ノ額ヲ加フレハ一億四千二百七拾万二千四百二十八圓七錢五厘トス然レ氏外國旧債ノ中初メ之ヲ英國ニ募ルニ

大藏省
当テ政府直チニ買收セシ所ノ證券アリ是レ
宜シク外債ノ中ヨリ除クヘキモノナリト雖
氏其後日抽籤ノ都合アルヲ以テ姑ラク之ヲ
除カス其數ノ今日ニ存スルモノ八万四千六
百磅我通貨四拾壹万二千八百四十八圓アリ
故ニ之ヲ減シテ一億四千二百二十八万九千
五百八拾圓六錢四厘ヲ明治八年六月我邦國
債ノ總額トス

内外公債ヲ全國人口ニ率スレハ一人壹圓四
拾三錢七厘ナリ流通紙幣ヲ人口ニ率スレハ

一人二圓八拾四錢四厘ナリ又國債紙幣合シ
テ人口ニ率スレハ一人四圓二拾八錢壹厘ナ
リ

内債ノ中新公債ノ利子四朱金札引換公債證
書ハ同六朱秩祿公債證書ハ同八朱ニシテ旧
公債ハ利息ナシ外債ハ新債九朱旧債七朱ト
ス今之ヲ以テ本年七月一日内外國債ノ現額
ニ就キ一年ノ利子ヲ算スルニ二百四拾二万
千七百七拾四圓ナリ

第二表ハ各種公債明治七年十二月ノ數トハ

年六月ノ數トヲ并舉シ以テ是歲半年間ノ償却ヲ示ス其數八年ニ至テ却テ九拾餘万圓ヲ多クスルモノハ金札引替證書及秩祿證書ノ増發アルニ由ルモノニシテ其實ハ内債ノ減スルモノ百二十拾万千七百九拾壹圓四拾錢八厘外債ノ減スルモノ七拾二万二千二百四拾圓アリ此表ニ掲シ各種紙幣七年ノ數ト第三表ノ數ト差異ヲ生スル所以ハ既第一回統計第三十六表ノ例言ニ云々スルヲ以テ復茲ニ贅セス
 第三表ハ内國公債諸證書ノ數ヲ列舉ス然レ氏上文云フ所ノ如ク内債ハ特ニ豫算ノ概計

ニ條リ加フルニ諸證書亦未タ悉ク財主ニ交附セスシテ其過不足ナキヲ保セサルニ由リ其數固ヨリ第一表ト吻合セス特ニ茲ニ附録シテ其製造發行ノ大略ヲ知ルニ供スルニミ國債證書類ハ紙幣寮ニ於テ之ヲ製シ直チニ國債寮ニ附シテ發行スルモノアリ或ハ記録寮ノ檢閲ヲ經テ後國債寮ニ附スルモノアリ然レ氏其三寮交遞ノ如キハ繁ク首キテ之ヲ記セス特ニ國債寮出納ノ大概ヲ舉クルノミ

秩祿

方今秩祿ノ制錯雜多端ニシテ種類一ナラス
加フルニ轉籍合冢除族死亡新賜等其年々ノ
轉換出入極メテ簡明ナリ難シト雖氏令其要
約ヲ提挈スレハ表上舉タル所ノ如クニシテ
其第一表ハ華士族平民各種秩祿ヲ綜核シ其
兩期ノ増減ヲ比較シテ且ツ兼子テ明治八年
七月一日ノ現數ヲ見ルニ便ニス而シテ第一
回統計表八年一月一日ノ現數ハ四万五千二
拾二圓二拾七錢六厘三毛ノ金祿ヲ米七千百

八十八石七升四合三勺七撮ニ代ヘテ合計ス
ト雖氏本表ニ至テハ各其實數ニ据リテ之ヲ
分チ且皇族寺院招魂社近衛兵等ノ諸祿旧表
ニ漏ルモノヲ舉ク抑秩祿ハ年々減少スルヲ
以テ常トス故ニ表上各項ノ増額ヲ見ルト雖
氏大抵組替ニ由テ生スル所ニシテ其實増ス
ニ非ス但其真ニ増スモノハ特例ヲ以テ旧神
官等ニ賜フ所ノ祿ノミ第二表ハ明治七年還
祿ノ特舉アリテ以來其奉還ノ總額ヲ七年十
二月以前ト八年一月以後六月ニ至ルマテト

ニ分テ掲載シ第三表ハ各種秩祿増減ノ數ヲ
約シ之ヲ三期ニ分テ照較ス

第一表中本祿外増祿ト云ヒ永世別祿ト云フ
ノ類皆其本祿ノ外一家ニシテニ祿ヲ賜フモ
ノナリト雖氏当初此重複ヲ致ス所以ニ至テ
ハ各種各別ニシテ一々ニ説明スルヲ得ス
八年七月一日祿米現數三百九拾九万三千三
百三十拾壹石ニ八年豫算表ノ米價四圓九拾錢
ヲ乘スレハ千九百五拾六万七千三百二十拾壹
圓餘ニシテ之レニ同年ノ金祿三万二百九拾

壹圓餘ヲ加フレハ千九百五拾九万七千六百
 拾二圓ナリ又之ヲ華士族平民ニ分テ各其祿
 高ヲ舉クルトキハ左ノ如シ
買受祿寺院祿皇
 族招魂社近衛兵
五項ハ計中
 二算入セズ

	家祿	總額百分ノ	賞典祿	總額百分ノ
華	四七六七、三〇八 ^四	二六、二	九二三五、二八 ^四	七三、四
士	一三四三五、六四三	七三、七	三二三五、六七	二五、七
平	一六九三、〇	〇、九	一〇、七〇四	〇、八

八年七月一日華士族平民ノ家祿及賞典祿アルモノ、負數ヲ舉ケ之ヲ每一人ニ平均スレ

ハ左ノ如シ

	家祿人員	一人平均金數	賞典祿人員	一人平均金數
華	四六七	一〇、二〇四、五	七九	一一六九〇、〇
士	三〇六一、五三	四三、八	一〇、七四九	三〇、〇
平	八三五	二〇、二	六八三	一五、六
合	三〇七、四五五	五九、二	一一、五一一	一〇、九、二

第二表人員ノ格ハ每期奉還ノ人數ヲ分テ三
 ト為シ其第一項ハ全祿ヲ奉還スルモノ、經
 數ヲ掲ケテ第二項中其増祿アルモノヲ分掲
 シ又第三項ハ本祿ノ中若干ヲ割キ奉還スル

モノ、數ヲ舉ク故ニ第三項ノ人負ハ本表之
ヲ奉還人負ノ部ニ舉クト雖氏尚其餘祿アル
ヲ以テ第三表比較人負ノ中ニハ再ヒ之ヲ有
祿華士族ノ中ニ算入セリ又表中獨リ人負ノ
項ヲ分チテ米金ノ兩格之ヲ分タサルモノハ
原簿此別ナキヲ以テナリ

家祿奉還ノ特許ハ明治六年十二月廿七日
在リテ之ヲ禁スルハ同八年七月十四日ニ在
リ然レ氏七月以前其既ニ願出セルモノハ皆
之ヲ允許セシニ由リ其資金ヲ下賜スルモノ

今日ニ至テ陸續絶エス故ニ今日尚其總數ヲ
計出スルコトヲ得ス表中舉クル所ノモノハ
特ニ八年六月以前現ニ資金ヲ下賜セルモノ
ノ數ナリ且ツ六月以前奉還ノ祿高表中載ス
ル所ノ如シト雖氏其祿米ノ如キハ各地貢納
ノ相場ヲ以テ資金ヲ賜ヒシニヨリ政府現ニ
費出スル所ノ金數ハ此表ヲ以テ知ルコトヲ
得ス

第三表中家祿賞典祿高七年一月一日ト八年
七月一日トノ比較第二表奉還祿數ト吻合セ

サレモノハ第二表ハ專ラ奉還ノ祿數ヲ擧ケ
第三表ハ除族死亡及新規賜増等ヲ乘除シテ
表出スルニ由ル八年一月一日ト同七月一日
トノ比較モ亦然リ

印紙鑑札諸表

凡テ印紙鑑札類ハ紙幣寮ニ於テ製造シ各其
主任ノ寮ニ附シテ之ヲ發行ス故ニ每表別テ
二ト為シ其紙幣寮製造ノ數ト其主任ノ寮發
行スル所ノ數トヲ分掲ス但証券界紙ハ紙幣
寮ニ於テ製スルモノアリ記録寮ニ於テ製ス
ルモノアリト雖モ一々之ヲ詳擧セス獨リ租
稅寮出納ノ數ヲ擧ケテ其餘省略ニ從フコト
國債證書表ノ例ノ如シ(國債第三表)
各表所係ノ項款皆一目瞭然ナルヲ以テ表ヲ

追テ注解ヲ下サス

九
痛
省

金穀出納

金穀出納ノ事ハ年々既テニ會計豫算ノ公布
アリ且ツ其統計工ニ於ケル亦強テ著論スハ
キモノナシト雖モ官府出納ノ多端ナル罪戾
固ヨリ一ニシテ而シテ足ラス且ツ毎會計年
末本寮製表シテ卿輔ノ覽ニ供フルモノアル
ヲ以テ今其中ニ就テ要約ヲ提シ此ニ掲ク覽
者之ヲ豫算表ト參觀セハ其官府ノ財政ヲ知
ルニ於テ思半ニ過ルモノアラン
去年會計年度ノ改正アリテヨリ毎年度ノ計

六
歳
省

算其終期ニ至テ之ヲ閉キス別ニ乙部ヲ開テ
其餘ヲ兼ケ必ラス残數ナキニ至テ止ム故ニ
第一第二表ノ會計モ亦八年六月ニ至リ其局
ヲ結フモノニ非スト雖モ今假リニ其現數ヲ
表出シ他日其完結スルニ至テ再ヒ表出スル
コトアラントス

第二表第三類ノ中證書米ノ一數(※)ハ實ハ本
期內ニ於テ之ヲ收入ス然レモ其納期原ト前
年ニ在ルヘキモノナルヲ以テ之ヲ越高ノ部
ニ出タス又同米七月ノ越高ノ一數(▲)本年尚

未納タリト雖モ其納期本年ニ在ルヲ以テ又
此ニ掲出セリ

第三表ノ品目多端ニシテ紛乱シ易キニヨリ
八年六月以後省議之ヲ改メ大別シテ金屬地
金銀屬地金金銀混合地金雜種金雜種異錢質
楮幣ノ六種トス故ニ本寮ノ表式モ亦後期ヨ
リ之ヲ改正スヘシ此年六月三十一日從來ノ
數ヲ分テ右ノ六種ニ條屬スルモノ左ノ如シ
金屬地金 四千二百三拾三兮六分五厘
銀屬地金 六万六千五百四兮六分五厘

金銀混合地金

八千八百八拾四号四分六厘

雜種地金

壹万六千六百十三号三分

雜種異錢

七百拾二個

質楮幣

七枚

第四表貨幣ノ中米銀墨銀英貨等ノ別アリト雖氏皆定例ニ從ヒ之ヲ折算ス又米穀ノ中大豆一石ハ米一石ト為シ粃一石ハ米五斗ト為シ皆正米ヲ以テ算出ス表中返納ナキモノト稱スルハ諸金穀初ノ貸出ニ係ルト雖氏後テ故アリテ之ヲ下賜スルモノアリ又年賦金ノ

中一時上納スルモノハ其幾割ヲ減スル等ノ數ニシテ其實ハ今日貸金ノ中ニ算入ス可カラスト雖氏特ニ当初貸出ノ額ヲ見ルタメニ此ニ出タシ以テ計數ヲ合スルノミ
第一回統計表ノ貸金表ハ特ニ金額ヲ以テ掲載セシニ此第一表ニ至リ米金ニ科ニ分舉ス故ニ其分合ヲ詳カニセント欲セハ須ク知ルヘシ旧表常用貸付原額ノ内ニ包含スル四十一万二千二百十壹圓三拾壹錢四厘ハ即チ米ヲ~~折~~算セシ金貨ニシテ又其旧藩貸付ノ如キ

毛米五千六百八十石八升七合三勺、折算
金額二万二千三百四拾六圓六拾九錢ヲ合計
セシモノナルヲ而シテ本表旧藩貸付ノ額
ニ於テ金十七万八千四百七十三圓四十錢五
厘米四千八百四十四石九斗五升六合ヲ増加
ス是レ則チ府縣ヨリ本年ニ至リ更ニ申報セ
シ所ノ數ヲ併スルカ故ナリ

第四表ノ外尚ホ準備貸出ニ属スルモノアリ
之ヲ第五表トス而シテ第一回表中ニ此表ヲ
欠クモノハ當時其計數ノ未タ詳明ナラサリ

シニ由テナリ

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

海関輸出入表

一此諸表、維新以來明治七年十二月に至ルマ
テ諸海関輸出入、詳ヲ舉ク是ヨリ先キ第一
回統計表中既ニ輸出入貿易、大概ヲ表出ス
ト雖トモ當時掲載スル所ノ者ハ特ニ其價五
万円以上ニ滿ツル所ノ物品、ミニ止マリ毎
年貿易ノ全数ヲ舉クルモノニアラス加フル
ニ其品目数量往々ニシテ杜撰ニ渉ルモノア
ル後租税寮ニ於テ異ヲ校シ謄ヲ去リ訂正

潤刪シテ新タニ編纂スル所ノ一表アリ其表
 本年ニ至テ始メテ成リ之ヲ從前ノ諸表ニ比
 スレハ計數頗フル詳確ヲ加フ因テ本察其新
 成ノ表ニ即テ更ニ此諸表ヲ製シ再ヒ之ヲ此
 ニ掲出セリ但往年海關規則ノ未タ整ハサル
 ニ當テハ凡ソ船舶器械類ノ購入及金銀米穀
 ノ輸出等官ノ直チニ出入スルモノハ間々或
 ハ海關ニ由ラス今回租稅察ノ表中亦之ヲ洩
 ラスモノアリ其得テ知ルハキモノハ百方推
 問考索シ之ヲ後文ニ附載スト雖トモ此餘錄官

府ノ出入ニ関スルモノハ尚必ラス遺漏ナキ
 ヲ保セス

一表中載スル所ノ凡百ノ物品租稅察ノ表ニハ
 混記シテ類別ヲ為サスト雖トモ今一新ニシ
 テ二三件以上ニ至ルモノハ各類ヲ分テ之ヲ
 記シ且ツ每表其品名順次ヲ同ウシテ對照參
 省スルニ便ニス是レ此ノ表ノ租稅察原表ニ
 異ナル所以ナリ又第一回統計表中ニハ一品
 ノ價額五万円ニ滿ツルヲ以テ準ヲ立テ其之
 ニ及ハサルモノハ之ヲ表上ニ漏ラスト雖モ

此表ハ一類ノ價一万円ニ滿ツルヲ限トシ其
 之ニ超エルモノハ特別掲記シ之ニ及ハサル
 モノハ毎類ノ下雜ノ一歟ヲ設ケテ其中ニ合
 載シ微少ノ数ト雖トモ敢テ捐棄スルコトナ
 シ

一明治八年輸出入表ハ租稅寮ノ原稿既テニ功
 ヲ竣スト雖トモ本寮調理未ツ成ラヌ本回ハ
 之ヲ省キ第三回年表ニ至テ之ヲ掲ケントス

輸出入比較

一明治元年以來各年輸出入ノ總數ヲ比較スレ
 ハ左ノ如シ

年	輸出	輸入	比較
元年	一五、五五三、四七三	一〇、六九三、〇七二	過 四、八六〇、四〇一
二年	一二、九〇八、九七八	二〇、七八三、六三三	不足 七、八七四、六五五
三年	一四、五四三、〇一三	三三、七四一、六三八	一九、一九八、六二五
四年	一七、九六八、六〇九	二一、九一六、七二八	三、九四八、一一九
五年	一七、〇二六、六四七	二六、一七四、八一五	九、一四八、一六八
六年	二一、一四二、〇一五	二七、六一七、二六四	六、四七五、二四九
七年	一八、七八〇、〇七九	二二、九二四、五八七	四、一四四、五〇八

一年々海関貿易ノ差ハ右表底舉ケル所ノ如シ
 ト雖トモ其毎歳海関ヲ出ツル所ノ貨幣ノ實
 額ハ決シテ之ト同シカラス今明治五年以後
 海関貨幣出入ノ得テ知ルヘキモノヲ舉ケレ
 バ左ノ二表ノ如クニシテ表中其出入ヲ乘除
 スルノ餘數即チ其歳真ニ海関ヲ出ツル所ノ
 貨幣ノ額ナリ因テ之ヲ前表貿易ノ差ニ比較
 スレバ明治五年ハ實額ノ右差數及ハサルコ
 ト八百三拾一万五千五百七円ナリ六年ハ同
 及ハサルコト四百四拾二万九千五百六拾三

円ナリ七年ハ實額ノ差數ニ超ユルコト八百
 七拾七万八千九百六拾三円ナリ

輸 出

	五年	六年	七年
金貨	一四二、六四六	二〇一、三六〇・二	七、五九七、七五三
銀貨		一九四三〇	八九七、六六〇
貳歩金	二、五三八、五四七	六〇〇、四五三	五、二六九、〇四
貳朱金	三、五九三		一、六三三
一步銀	一、三七四、九六三	五、一六、六四五	七、三六六、〇四
一朱銀	三、八三、六七五	五、五五、三三七	八、一八、二七三

	通計	一朱銀	一步銀	銀貨	金貨	銀塊	金塊	洋銀	
右ノ外五年ノ部ニ貨幣類六千七百六十五個アリ亦其價ヲ詳カニセス	五年	三、六九一、五一〇						三、六九一、五一〇	
	六年	三、〇八〇、五四二	一、一七三		三六、二〇〇	二、四二四	一、九七七、七〇七	一、〇六一、九五八	
	七年	一、〇七一、七三一	一、六八一三	七、四四	一、六〇〇	一、三二一	一、一〇〇	一、〇三二、〇四四	

	通計	洋銀	楮幣	旧銅貨	銀塊	支那金	圓銀
右ノ外五年ノ部中金塊百三十個銀塊千六百十五個貨幣類四百十二箱アリ其價ヲ詳カニセス	輸入	四、五二四、一七〇	一、五七五、六	四、三二七、五			二、一七一、五
		五、一二六、二二七	五、九七四、五九	三、三〇〇	八、二六一、四〇	二、八六一	
		一、三九九、五二〇、三	三、三八二、八三七		六〇〇		三、二九三、九

一左ノ小表ハ明治五年以来官省輸出入品ノ税
関ニ經由セサルモノヲ抄出ス前文言フ所ノ
如ク凡ソ官府出入ノ海関ニ由ラサルモノ其
明治六年ノ前ニ在ルハ概皆今日ニ知ルコト
ヲ得ス又六年以後海関ノ法則大ニ整備スト
雖トモ尚其表上ニ洩ル者トキヲ保スヘカ
ラサルニ似タリ加フルニ例トヘハ官府購入ス
ル所ノ船艦又ハ大機械ノ類ノ如キ其物ハ前
年ニ輸入シテ代價ハ後年ニ拂フモノアリ此
ノ如キハ其代價他年税関ニ由テ出ルモ其呆

シテ前年ノ代價タルカ抑々別ニ貿易外ノ輸
出金ニ係ルカ税関ノ吏ニ在テハ問フ所ニア
ラズ且ツ今日ヨリ之ヲ言ヘバ其船艦機械ハ
果シテ海関ニ由ラザリシカ代價ハ果シテ海
関ニ經由セシカ且ツ其代價海関ニ經由スル
モノ之ヲ同品類中ノ價額ニ合計スルカ或ハ貿
易外金貨輸出ノ部ニ算入セシカ是又極ノテ
知リヤスカラス故ニ左ニ載スル所ノ二件ハ
特ニ其分明ニ海関ニ由ラサルモノヲ摘出ス
ルノミニシテ固ヨリ税関ノ欠ヲ補ヒ盡スト

海関
備考

云フニアラス唯此ニ記存シテ以テ他日ノ照
 考ニ資セントスルノミ且ツ出納察輸出米銅
 ノ如キモ其物量ハ分明ニ租税察原表ニ漏洩
 スルヲ知り得ツリト雖トモ其代價ニ至テハ
 到底其如何ヲ窮極スルコト能ハス獨リ蕃地
 事務局ノ船艦ハ物品代價共ニ分明ニ海關ニ
 由ラサルモノナリ

出納察輸出

支價	四年	五年	六年	七年
九〇,九二六,八五四	九〇,九二六,八五四	一六九,一三八,五九九	二一七,一六〇,二	二一七,一六〇,二
一七〇,一二八	一七〇,一二八	二六三,一〇九	二六三,一〇九	二六三,一〇九

銅		米												
輸送	不詳	英	支	計合	宗呂	豪	印	澳	米	英				
價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	
百七十三	二二六,九五	三六五,六一	四二九,九七六	一,三三三,九四〇	一,七三二,九〇五	九,一三三,八〇二	七〇五,三六〇	一三,六三五	三〇五,八一四	一六,九八八	二〇六,二五〇	三三,五〇七	七〇,二六六,五四	一〇,三三二,二

鐵

計	合
價	斤
二二六、〇九五	一四四三、七四〇
七九五、五九七	三、五五四、二七〇

舊蕃地事務局

百五拾九万五百二十円五十一銭

明治六年船艦十三隻買入代

内

百拾五万三千七百二十三円

明治七年中押下高

残四十三万六千七百九十七円五十一銭

明治八年越高

輸出

一本邦輸出ノ物産蚕類^絹茶葉ヲ以テ首トスルハ固ヨリ論ヲ待タス其戊辰以來明治七年ニ至

蛹	蚕	元	二	三	四	五	六	七
〇・五	四・二	年	年	年	年	年	年	年
一・〇	四・五							
〇・四	三・〇							
一・一	四・〇							
一・五	三・四							
一・〇	三・六							
一・三	三・〇							

ルマテ年々輸出ノ價額平均蚕類^絹ハ全輸出百
分ノ中五十三ノ夥シキニ至リ茶葉ハ其二十
六ニ居リ自餘諸品ハ僅カニ二十ヲ占ムルニ
過ラス之ヲ概スレハ蚕類^絹ハ全輸出ノ半ヲ占
メ茶葉ハ四分ノ一ヲ占メ其餘諸品ハ五分ノ
一ヲ占ムト謂テ可ナリ今之ヲ年々ニ細別ス
レバ左ノ如シ

大蔵省

卵紙	二三八	一九四	一八〇	七一	一三二	一四五	三・四
茶葉	二三〇	一六・三	三一〇	二六・二	二四〇	二二四	三九・二
其外	一〇・三	一六・八	一九〇	一八・三	二七〇	二六四	二六・二

又右諸品ノ量数ヲ分掲スルニ尤如シ

年	蚕絲	蛹	卵紙	茶葉
元	一四四三、八二五	一六六、九九七	一、八八六、三二〇	一〇、一一五、五九三
二	一〇、二二、二四〇	二〇、二、四八六	一、三九八、九〇〇	八、五九五、四五〇
三	九六七、四四一	一三九、七六九	一、四〇、六〇、三三三	一、二、三一四、四〇二
四	一七六二、二一五	四〇、一五〇、八	一、四〇、〇、〇、二七	一、四、〇、六六、八五三
五	一五九三、九七二	四四四、八四九	一、二八七、〇四六	一、四、七、三三、二六一

六	一六五、一四三六	三七四、四六六	一、四一八、八〇九	一、三、三四〇、〇〇九
七	一五一三、九一〇	三九六、〇一七	一、三三五、四六五	一、九、一二九、〇三〇

又右ノ量数ト金額トニ由リ其年々ノ價格ヲ

觀ルニ左ノ如シ

年	蚕絲	蛹	卵紙	茶葉
元	四円五五	〇円三一	一円九七	〇円三五
二	五円八七	〇円六四	一円七九	〇円二四
三	四円七七	〇円四八	一円八二	〇円三七
四	四円七九	〇円四九	〇円九二	〇円三三
五	三円五八	〇円五七	一円四六	〇円二九

大蔵省

七	三円七一	〇円六四	〇円五五	〇円三八
六	四円五九	〇円六四	二円一六	〇円三五

右、三表ニ據テ之ヲ察スルニ蚕絲輸出金額、此比例尤モ多キハ明治四年ニ在リ卵紙、比例尤モ多キハ二年ニ在リ茶葉、尤モ多キハ七年ニ在リ而シテ右七年ノ中蚕絲卵紙ノ比例數相合シテ茶葉ニ及ハサルハ獨リ明治七年、一年アリ是レ該年ハ卵紙ノ價甚シク低下セシノミナラス加フルニ其輸出ノ量數蚕絲卵紙共ニ前年ニ及ハス而シテ茶葉ハ其量

ト價ト共ニ大ニ前年ノ上ニ在リシニ由レ、又右ノ表中其量數ヲ以テ比較スレハ蚕絲ノ最モ多キハ四年ニ在リ卵紙ノ尤モ多キハ元年ニ在リ茶葉ノ尤モ多キハ七年ニ在リ又其價格ヲ以テ比較スレハ蚕絲ノ最モ貴トキハ二年ニ在リ卵紙ハ六年ニ在リ茶葉ハ七年ニ在リ

明治七年ニハ右表中載スル所ノ輸出卵紙、外横濱卵紙高其價格、低下ヲ苦ニ相議シテ燒棄スル所、卵紙枚數四十四万八千四百二

拾枚アリ其價一枚九二十錢通計八万九千六百八十四円ニシテ之ヲ同年輸出ノ全數ニ加フレハ枚數百七拾八万三千八百八十五枚ニシテ即チ前年輸出ニ超ユルコト三十六万五千七十六枚ナリ

一人民和米麥ヲ輸出スルノ禁始メテ解ケレハ明治六年八月一日ニアリ尋テ同年十一月更ニ米粉麥粉ノ輸出ヲ許ルニ翌年五月ニ至テ又暫ラク一切米麥類ノ輸出ヲ停ム故ニ本表上載スル所ノ米麥ノ輸出ハ皆六年以後ニ

アリト雖トモ前文記スルカ如ク其前後別出納寮ノ手ヲ經テ輸出スル所ノ官米アリ之ヲ合シテ明治五年ノ輸出米九千九百九十三万八千。二十八円價百七拾三万九千九百。五円同六年ノ輸出米一億九千八百十一万二千九百八十六円價三百六十万四千九百七十四円麥二百三十六万三千六百十。円價五万四千四百五十七円同七年ノ輸出米二千。八十二万九千六百八十六円價四十八万七千八百四十二円麥五百六十二万。七百五十。円價九万

六千六百九十三円ニシテ右ノ外六年ニハ麦粉一万九千七百五十九斤ノ輸出アリテ其價二千九百二十四円ナリ

一右ノ外其数甚ク多カラスト雖トモ羊ヲ逐テ漸加ナルノ勢アルモノハ第一石炭、第二扇、第三漆器、第四錫、第五煙草ニシテ就中石炭ハ明治元年ノ輸出僅カニ八万五千円ニ滿タスレテ同六年ニ至テハ六十四万五千五百余円ノ巨額ニ上リ團扇摺疊扇ハ明治二年始メテ百九十三年ノ輸出アリテ同七年ニハ九万九百六

十七円ノ輸出アリ故ニ左ノ小表ヲ製シテ石五品ノ輸出数ヲ提奉シ其年々隆進ノ勢ヲ詳ニス又銅鑄類ハ戊辰以來五年ニ至ルニテ其数暴カニ進ミテ五年ノ輸出百五十万円ニ超ヘシニ六年以後ハ頗ルニ減少シ僅カニ前年ノ半額ヲ出入スルニ過キス然レトモ是レ又開港以來輸出増加ノ着大ナルモノタルヲ以テ之ヲ表尾ニ附記セリ自余諸品ニ至テハ概皆一張一弛定例アルコトナシ

元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
----	----	----	----	----	----	----

大蔵省

戊辰以来逐年増加ス即右四品ノ景形大畧左
如シ

元年	二二九、五四六	六一九、七二八	一九三、五七三	一二三、九五八
二年	六〇八、九五〇	五四六、〇四〇	一九七、〇四三	三四二、一八二
三年	六六四、九七六	一五一、一六〇	一九九、一三三	四五三、〇七九
四年	八六九、七〇〇	五五、四九〇	四六八、七八九	三五二、四二六
五年	三〇四、六二九	九三六、〇六一	三五八、五三〇	五三三、八八〇
六年	一、二九二、一四四	一、二八八、四八八	三、六三一、二一二	三、四〇、二五七八
七年	一、四〇六、〇	一、三七四、二六六	四、一五七、二〇七	三、五七六、一八五
	羅紗	吳呂	金巾	木綿絲

右ノ表中吳呂ノ輸入ノ中コ口大ニ衰ハテ近
年再ヒ氣勢ヲ復セシハ佛國ニ於テ製スル所
ノ毛織モスリン(原名モウセライン、デライン)
其模様深色共ニ近コ口大ニ日本ノ嗜好ニ適
スルモノヲ製出セシニヨルト云フ故ニ六年
吳呂ノ輸入百二十八万八千四百八十八円
中モスリン百七万六千四百四十四円アリ同
七年ノ輸入百三十七万四千六百六十六円、中
モスリン九十八万二千三百三十七円アリ其餘
吳呂類ハ兩年合シテ六十万内餘ニ過キザル

ノモ又右表中綿絲ノ輸入明治五年ハ五百三十餘万円ニシテ九ノ開港以來一品ノ輸入未タ此巨額ニ上ルモノアラズ其常年ノ雖トモ亦必ラス三四百万円ノ間ニ在リ之ニ加フルニ金中類ノ輸入亦近年ハ畧々綿絲ト相頡頑シ其餘些細ノ品ヲ合算スレハ年々外國棉貨ノ我邦ニ入ルモノ多ク一千万円ノ下ニ降ラズ此勢ヲ以テ内地棉花ノ産出ヲ壓スレハ其年ヲ逐テ衰微ニ赴クハ亦宜ナラスヤ

港分

一毎歲輸出入ノ數諸港ヲ分テ之ヲ記スルモノモ亦明治六年ニ始マリ其以前ハ之ヲ知ルヲ得ヌ其六七兩年諸港輸出入ノ數ヲ分記スレハ左ハ如シ

港名	輸		入	
	六年	七年	六年	七年
横濱	一五三三五二四九	一二六七七九二	一九七三二二五	一五九二六〇一九
神戸	二四五九八七〇	三二八七五九〇	五九七一八九	四九七三五一六
大坂	八九五九〇五	六六八〇七三	四〇三一九三	三八二四六二
長崎	二〇〇二八一五	一八六七六九〇	一九六一九七三	一六一六九〇七

大坂

函館	四四七、六一〇	二七八、八七四	三二八、二〇	一六、八三三
新泻	五六五	五九	七二〇	八八五

米六年輸入、數中各港積歸、數アリト雖トモ原表港コトニ之ヲ分記セス故ニ右ニ載スル所ハ輸入總計ノ數ナリ

一左ノ略表ハ生糸、卵紙、茶葉、石炭、銅鑄、五品六
七西年各港輸出、合數ト每品、中ニ就テ諸
港、出ス所各其百分、幾何ニ居ルトヲ示ス

生糸	一三、〇一六、三四八	三、七九三、九五九	八、二二六、一八三	一、九四八、〇八	五、五四九、三一
卵紙	九八・六	九九・九	六九・〇	一六・三	三七・六
茶葉	九一、一七五	六五・六	二九七、五〇六三	二九、七〇七	五七六、〇八二
石炭	七〇・七	二九・九	二九・九	二五	三九・一
銅鑄					

大阪	八六、八八五	一、六二二	二二	二七、五四一六
長崎	二八三	七〇九、八三一	九七、一九八九	六三、三四九
函館	〇・〇	五九	八・一	四三
新泻			五九〇	二七、九四

一又右ノ例ニ倣ヒ羅紗、吳呂、金巾、木綿糸、四品
各港兩年輸入、總額及其百分、比例ヲ奉ク
レハ左ノ如シ

羅紗	一、三六、九七一	二、二七三、四八二	四、七六六、四〇四	六、三一、四六七
吳呂	八〇・八	八五・三	六一・二	九〇・四
金巾	二、三三八、八五二	三、七五、八〇七	二、五七、七六二	五、四一、五五〇
木綿糸	一、六・九	一、四・一	三、二・九	七・七

大阪

新泻	函館	長崎	大阪
		二九八四六 二・一	五三六 〇・〇
	〇・〇	〇・〇	八〇〇 〇・〇
	〇・〇	一・二二〇 〇・〇	七二六〇 〇・一
	〇・〇	四四五六八 五・七	一二五七五 一・八
	〇・〇	一・二九五	

國分

一輸出入國分ノ數モ亦其知ルヘキモノハ明治
 六年以後ニシテ其六七兩年ヲ平均シ之ヲ各
 國ニ比例スレハ其輸出ノ數支那ハ百分ノ二
 十一・六〇ニ在リ英國ハ二十二・四九ニ在リ佛

國ハ十六・三三ニ在リ米國ハ二十九・九二ニ在
 リ日耳曼ハ〇・六一ニ在リ又其輸入ノ數ニ於
 テ支那ハ三十五・八四ニ在リ英國ハ四十四・八
 四ニ在リ佛國ハ八・五〇ニ在リ米國ハ四・一六
 ニ在リ日耳曼ハ五・六四ニ在リ其餘諸國ハ輸
 出ニ在テ百分ノ九・〇五ヲ領シ輸入ニ在テ百
 分ノ一・〇〇ヲ領スルニ過キズ然レドモ原表
 香港ヲ支那ノ部ニ算入スルヲ以テ右ノ比例
 中支那ハ必ラス大ニ實數ノ上ニ在リ其英佛
 等ノ數モ亦隨テ實ヲ失フモノナキコト能ハ

不故ニ今回ハ其詳細ニ説キ及ホサス八年以
後區分ノ正ヲ得ルヲ待テ更ニ論~~核~~析スルコト
アラントス

物産

物産諸表(獨リ第五表ヲ除ク)ハ明治六年勸業
寮徵集ノ諸縣物産調ニ據リ之ヲ製為ス同年
諸縣報上ノ物産固ヨリ此ニ止マラス然レモ
規則未ク畫一ナラスシテ之ヲ綜核スルコト
頗ル難シ故ニ本表ハ特ニ其尤ナルモノヲ枚
キ掲記スルモノニシテ未ク全國物産ノ完璧
タルヲ得ス且ツ其各種量名ノ如キ一品ニシ
テ或ハ貫ヲ以テスルモノアリ或ハ駄ヲ以テ
スルモノアリ束ヲ以テシ枚ヲ以テシ石斗樽

袋等ヲ以テスルモノアリ加フルニ其實量地
方又各々一ナラス此類總テ之ヲ從來ノ成書
ニ参考シ或ハ之ヲ主業ノモノニ諮詢シテ略
其精ヲ得テ後折算歸一セシムト雖トモ亦
推測懸断ヲ免カレヌ

東京府及外四縣總テ物品ヲ掲載セサルモノ
ハ此數縣ハ同年内終ニ其報上ナキヲ以テナ
リ
第五表ハ本寮曾テ勸業寮ニ詢議シ墾國政府
ノ問ニ答フルモノナリ然レトモ其數亦未ッ決

シテ舛異ナキヲ保セヌ

物價

此表ハ明治七年大藏省諸縣ニ令シテ各地月々ノ物價ヲ報上セシムルモノヲ抜抄シ其末附スルニ同年諸縣ノ貢米相場表並ニ米麦大豆縣分表ヲ以テス此諸表ハ縣内各市場ノ通價ヲ取リ之ヲ平均算出スルモノニシテ其數頗フル精確トス

第一米價表中周歲ヲ平均シ其價最モ貴キモ薩摩第一武藏第二駿河第三上野第四安房第五土佐第六相摸第七大隅第八對馬第九東

京第十ニシテ其最モ賤シキモノハ佐渡第一
 羽前第二羽後第三ナリ又其月々ノ價ヲ以テ
 論スレバ羽前一月ノ價二圓二十九錢。五八
 最卑ト為シ對馬十二月ノ價八圓七拾壹錢
 六六七ヲ最高トス然レトモ全國ノ大勢ニ就
 テ之ヲ論スレハ東西兩端最昂最低ニシテ薩
 二國平均七圓拾六錢二一四三陸
 二羽平均三圓九拾錢。二三七 西端ニ亞テ
 最モ貴トキモノハ關東地方ナリ 武相二總二
 野安房平均
 六圓拾六 又最モ奇トスニキハ全國ヲ豎斷シ
 其腹背ヲ分テ米價著ルシキ差異アリ岩城ヨ

リ石見ニ至ル迄北海二十個國ノ中獨リ石見
 若狹ヲ除クノ外石見五圓五拾壹錢二八五若
 狹五圓十六錢二九二
 其價五圓ノ上ニ出ツルモノナク筑前ヨリ常
 陸ニ至ル迄南海三十九ヶ國ノ中ニ曾テ一
 國ノ五圓ニ下ルモノナシ曾テ試ミニ之ヲ算
 スルニ北海二十ヶ國ハ平均四圓三十六錢五
 四四南海三十九ヶ國ニ平均六圓四拾壹錢五
 四一ニシテ其餘海ニ沿ハサル十四國ハ平均
 五圓九拾三錢八一三ナリ其差左ノ如シ

南海諸國

北海諸國

東京	六八二七九一	但馬	四六八九〇八
武藏	七二八五八八	丹後	四七九〇七七
相模	六九七四五八	若狹	五十六二九二
上総	六五三三七一	越前	四六三七六〇
下総	六六七六〇一	加賀	四七一一九一
安房	七一六七三四	能登	四四一二〇〇
常陸	五九九〇三五	越中	四二三四六三
伊豆	六七七三五八	越後	四〇七八一八
駿河	七二七二四四	佐渡	二六九三八四

遠江	六八〇三三八	磐城	四三八六六四
三河	六五六九一三	陸前	四三〇四四三
尾張	六四八五〇五	陸中	四三七五一八
伊勢	六五九九三四	陸奥	三八八〇一二
大坂	六五七八九三	羽前	三二三四七一
和泉	六四三三九三	羽後	三七一七三六
摂津	六五〇〇〇八	因幡	四二二五七八
紀伊	六七一二六二	伯耆	四七〇八四六
淡路	六三〇〇三六	石見	五五一二八五
播磨	六三七七一九	隱岐	四六〇〇六四

備前	六一二四八八	出雲	四九五二七五
備中	六三〇六六四	平均	四三六五四四
備後	五八二一八四		
安藝	六三五三四六	海 _ニ 沿 _ハ ル諸國	
周防	六二二一四四	上野	七二六五六八
長門	五六三四三九	下野	六一一七一
阿波	六五二二〇三	西京	六四〇七四一
讚岐	六六四三八二	山城	六四〇七四一
伊豫	六三三六二〇	大和	六三九一五六
土佐	七一二六二六	河内	六四四五七七

筑前	五四六八六六	丹波	五四五四五八
筑後	五五三〇八六	近江	六一一七二七
豊前	五八八一〇〇	美濃	六四四〇七二
豊後	五七〇七〇〇	伊賀	五七九三七二
肥前	六二五五九二	飛彈	五二七五四九
肥後	五三〇六四五	信濃	五二三〇七二
日向	五三九四九二	甲斐	六一一四〇一
大隅	六九五二七三	岩代	三九九九九三
薩摩	七三七二五五	美作	五五八四五八
壹岐	五八六六一五	平均	五九三八一三

大藏省

對馬 六九二八二九

平均 六四一五四一

麥ハ關國生セサルノ地トキ物産ニシテ略米

ト同視スヘキモノナレトモ其價値高下ノ摸

様大ニミ米ト同シカラズ表ニ據テ之ヲ按ス

ルニ諸國中最も貴トキモノ駿河第一上総第

二安房第三近江第四遠江第五伊勢第六尾張

第七伊豆第八伊賀第九土佐第十ニシテ其最

モ卑キモノハ壹岐筑後肥前ナリ又海ノ南北

ヲ以テ之ヲ分ツニ決シテ米價ノ如キ分明ノ

差異ヲ見ヌ獨リ其三陸二羽ニ卑シキハ米ト

相同シウシテ其最も貴キ地方ハ勢尾參遠駿

豆ノ間ニアリ大豆ハ土佐紀伊遠江伊賀西京

ニ最も貴ウシテ陸中佐渡ニ最も賤シク而シ

テ地方ヲ以テ之ヲ論ズレハ亦三陸二羽岩城

最も賤シ其餘塩酒以下四品ハ全國悉ク産ス

ルモノニ非ズ各地之ヲ生ズルノ多少ニ隨ヒ

其價格一例ヲ以テ言ヒ難シ今米麥以下各品

其最も貴キモノ五國其最も賤シキモノ三國

ヲ舉ケテ左ニ開列ス然レトモ何物ノ價何國

尤モ貴トキ何國最モ卑シキト云フカ如キ往
 其國獨リ其故アリテ之ヲ致シ比隣必シモ
 然ラサルモノアリ故ニ不ヲ以テ其全國ノ大
 勢ト同視ス可カラザルナリ

米

麦

最モ高キ國

最モ高キ國

薩摩	七三七二五五	駿河	四六一六五九
武藏	七二八五八八	上総	四六一一八二
駿河	七二七二四四	安房	四四六一四二
上野	七二六五六八	近江	四三八〇六九

安房

七一六七四三

遠江

四〇三一三二

最モ安キ國

最モ安キ國

佐渡	二六九三八四	壹岐	一三五六五八
羽前	三二三四七一	筑後	一四六〇一五
羽後	三七一七三六	肥前	一六八六一九

大豆

塩

最モ高キ國

最モ高キ國

土佐	五九三一〇七	飛騨	三三八九七八
紀伊	五六七三四〇	岩代	三二九六五七
遠江	五六七〇七九	信濃	三〇三九八三

伊賀 五五八四。一 磐城 二六。五八六

西京 五五。五八四 甲斐 二三二。〇。二

最_モ安_キ國 最_モ安_キ國

陸中 二六六九八三 摺津 〇。五五八四九

佐渡 二七一七三九 播磨 〇。五八四。五

陸奥 二七八六八七 隱岐 〇。五九七九五

酒 醬油

最_モ高_キ國 最_モ高_キ國

薩摩 一三六。九三七 駿河 九。二六二三

大隅 一三一。三一八 伊豆 八六七八四。〇

東京 一。七五九七九 飛彈 八。二七七八

安房 一。七一。二九。〇 上野 八。八六四七

日向 一。五二。三二。二 武藏 七。八七六八七

最_モ安_キ國 最_モ安_キ國

摺津 三七二七六四 筑後 二九。五八九

佐渡 三九七六八五 豐前 三一六二。五

丹後 四。一五八。〇 筑前 三。五五九九五

水油 石炭

最_モ高_キ國 最_モ高_キ國

飛彈 三。七六九七八 近江 〇。五七九三一

大藏省

陸奥	三〇一六三一	九武藏	四六二四三
羽後	二九七六六六	薩摩	四五〇〇
陸中	二九五八〇	伊勢	四二三四七
石見	二七三七二	六東京	四〇一〇一
最モ安キ國		最モ安キ國	
大坂	一五四八〇	七五岩城	五八五四
和泉	一五四九一	二四常陸	五八七五
摂津	一六二九四七	〇〇豊前	九七二二

終年間物價最貴ノ月ハ各品皆小差異アリト
 雖トモ大抵年首最モ賤シクシテ漸ク其價ヲ

増シ十月ヨリ十二月ニ至テ騰貴ヲ極ム其間
 往々二三倍ノ甚シキニ至ルモノアリ但水油
 ハ獨リ然ラス一月三月ノ間最モ貴トクシテ
 其最モ賤シキハ八月ニ在リ

第九表ハ均シク明治七年ノ米價ナリト雖ト
 モ貢納相場ハ毎年十月十五日ヨリ十二月十
 五日マテ六十日間ノ價ヲ平均スルヲ以テ之
 ヲ第一表ノ周年ヲ平均スルモニ比スレハ
 稍々貴シトス又第十表三穀ノ價ハ其周年ノ
 價ヲ平均スルモノナリト雖トモ其徴取スル

所ノ地域同シカラサルヲ以テ又小不同アリ
且ツ彼南北米價不同ノ如キ此表ニアリテハ
第一表ノ如ク分明ナラハ然レノモ細カニ其
地ニ就テ之ヲ探レハ固ヨリ毫モ異ナルモノ
ナシ
第十一表ハ東京米商社ニ於テ年々平均スル
所ノ米價ニシテ^後官府ノ物價ハ大抵二三年以
来ニ止マリ其餘ハ皆得ハカラ^ル此表稍々其
前ニ遡ルヲ以テ此ニ附記ス^然雖トモ其慶應
以前ニ在ルモノハ亦得ルコト能ワスト云フ

段別

維新以降未タ段別調査ノ舉アラズ目今地理寮
備フル所ノ山林田野ノ數ハ藩縣改置ノ際諸藩
ヨリ交附スル所ノ田數ニ沿襲スルモノナリ故
ニ其田圃ノ數ノ如キハ各地皆其檢地帳ナルモ
ノアリテ其概畧尚或ハ據ルヘシト雖モ山林原
野ノ類ニ至テハ殊ニ其盪浪ヲ極メテ特ニ數目
アリト云フニ過キス田圃ノ數ト雖モ其檢地ア
リテ以來概皆數十百年ノ久シキヲ經ルモノナ
レハ其間必ラス増減アルヲ免カレス且ツ其畝

モ分明ナリ難キモノハ畑地屋敷地ノ別ニシテ
從來屋敷地ハ貢租上畑ニ准スルヲ以テ二種混
淆今日ニ在テハ殆ント識別ス可クラス況ンヤ
其地方ニ随テ或ハ石高ヲ以テ称スルモノアリ
或ハ反高ヲ以テスルモノアリ又邊僻ノ地ニ至
テハ間々或ハ束數ヲ以テスルモノアリ又其量
地ノ寬嚴延縮等各地極メテ一ナラス今一例ヲ
舉ケテ之ヲ証スルニ地租改正ノ舉アリテ以來
宮城縣ノ如キハ旧反別六万七千町^餘中其新夕ニ
増加スルモノ一万六千餘町濱田縣ノ如キハ旧

二万八千五百餘町中其増加スルモノ五千七百
餘町アリ之ヲ概スルニ耕地ノ面積ハ大抵東西
兩裔ニ延ヒテ中國及ヒ關東ノ地ニ縮ナリ今回
地租改正局ノ測定ヲ經テ我邦ノ面積ハ始メテ
精確不動ノ真數ヲ得ヘシト雖氏目今其功ノ既
テニ竣スルモノ僅々五六縣ニ過キス其全國完
成ノ期ハ蓋シ尚兩三年ノ後ニ在リ是ヲ以テ表
中掲クル所ハ姑ク幕政以來ノ旧數ニ據リ之
ヲ耕地山野ノ二類ニ大別シテ附スルニ人口戸
數ノ比例ヲ以テシ他日計數ノ其真ヲ得ルヲ待

ツテ逐次更改スル所アラントス

大藏省

銀行

銀行ハ其號數一ヨリ五ニ至ルト雖モ其第三行
ハ一旦願請シテ允裁ヲ經ルノ後未タ開業ニ至
ラスシテ解社セシニヨリ其方今營業スル所ノ
者ハ通シテ四行トス本表第一號ハ其全体ノ大
勢ヲ示スモノニシテ其第二號ハ各行創立以來
毎半年利益ノ厚薄及財主配当ノ多少ヲ通覽ス
ルニ便スルモノナリ

各銀行株數ハ銀行條例ニ一株ヲ定メテ百圓ト
為スヲ以テ其資本ノ高ヲ觀レハ則チ株數ノ幾

大藏省

何ナルヲ知ルヘシ是ヲ以テ表中之ヲ掲ケス但
第一第二ノ銀行ハ初ノ開業ノ時ニ當テ株數未
タ満タス最初一期ノ間第一銀行ハ其足ラサル
モノ五百九十二株第二銀行ハ其足ラサルモノ
百八十株アリ故ニ第二表中第一期每一株ノ配
當モ亦此數ヲ除テ之ヲ算ス

第一表ハ其條款一々銀行條例ノ成規ニ據ルモ
ノナレハ復タ解明スルヲ待タス其第二表中別
段積立ト題スルモノハ條例十三條ニ據リ其純
益ノ十分一ヲ貯蓄シテ不時ノ變災ニ備フルモ

ノ役員配當ト題スルハ其月給定額ノ外各行利
益ノ厚薄ニ隨ヒ賞與ノ法ヲ設ケテ役員ヲ獎勵
スル者割賦ト題スルモノハ則チ純益ノ内右ノ
二項ヲ減去シ其餘ヲ毎行株數ニ照シ配賦スル
モノニシテ即其年株金ノ利分ナリ右ノ外別ニ
株金利分ノ中ヨリ若干圓ヲ割テ後期ニ廻シ後
期或ハ利潤ノ薄サナルトキ之カ準備ト為スモ
ノアリ即チ表中前後期繰込ト称スルニ款ニシ
テ其數ハ定額ナシ每期臨時ノ議ヲ以テ之ヲ定
メ若シ後期ニ至リ幸ニシテ之ヲ用ユルコトナ

キ時ハ其期ノ末ニ至リ前期ノ分アヒテ以テ之ヲ株主ニ配賦ス右益金内譯ノ法第一銀行ヲ以テ之ヲ例スレハ左ノ如シ

本期ノ純益之ヲ一年ニ率シテ一割ノ上ニ在ル時ハ

別段積立 百分ノ十

役員配当 同 十七

株主割賦 同 七十三

本期ノ純益一割以下三分以上ニ在ル時ハ別段積立 百分ノ十

役員配当 同 十五

株主割賦 同 七十五

若シ純益三分ノ下ニ在ル時ハ臨時ノ會ヲ

開テ分配ノ法ヲ議定ス

第二銀行純益分配ノ法ハ専ハラ第一銀行ニ模擬シテ之ト異ナルコトナシ第四第五モ亦第一銀行ニ倣フト雖氏第五銀行ニハ非常ノ功績アルヨリ外每期役員賞與ノ法ナシ今左ノ小表ヲ作テ各行ノ規則ヲ列擧ス

行號 純益 役員配当 株主割賦 後期繰込

第一銀行	一分以上	十七	七十三	定則ナシ
	三分以上	十五	七十五	
第二銀行	一分以上	十七	七十三	定則ナシ
	三分以上	十五	七十五	
第四銀行	一分以上	三	九十七	定則ナシ
	一分二五以上	四	九十六	
第五銀行	一分五以上	五	九十五	定則ナシ
			百	

是ヲ以テ第二號表ニ就テ本期ノ純益ヲ二倍シ之ヲ各其行ノ資本ニ照シテ其一年ノ利益一割以上以下ニ在ルヲ審カニシ之ヲ百除シテ十七等ノ數ヲ乘スレハ役員ノ配当ヲ得七十三等ノ數ヲ乘スレハ株主割賦ノ數ヲ得ヘシ然レモ之ヲ本表ニ徴スルニ各行每期ノ計算皆小差異アリテ必ラスシモ此例ニ合セス是レ蓋シ每行其時ノ便宜ニ隨ヒ微シク本則ニ出入スルモノアルニ由ルナリ

各銀行定額楮幣ノ外第二銀行ニハ別ニ第三表舉タル所ノ洋銀券ト名ツリル者アリ此楮幣ハ明治二年横濱為換會社創立ノ際詠港洋銀相場ノ權ヲ收攬スルヲ始メテ發行スル所ニシテ當時製造ノ數百五十萬圓アリ後チ明治七年諸為換會社解散セラレニ及テ其銀券ハ第二銀行ニ附シテ之ヲ交換セシム然レモ其發行額ハ

未タ決シテ製造ノ額ニ満タス且ツ其流通年々
多クアリ今其明治七年後半年ト八年前半年ト
ノ數ヲ比較シテ第三表ヲ製ス

電信

電信表ハ電信寮ノ報移ニ基ツキ諸省寮司ノ加
ヘテ製出スル所ニシテ其建柱架線ノ里程及報
數音信料數ヲ并ヘ舉ケ第二表ハ第一表ノ中ヨ
リ其建柱架線ノ里程ヲ抜テ附スルニ其每線開
信ノ年月ヲ以テシ第三表ハ又其報數音信料數
ヲ各局ニ別テ詳載ス

郵便

郵便表ハ驛遞寮調査ノ數ヲ其原表ノマ、掲出
スルモノニシテ第一表ハ明治七年ノ分ニ係リ
第二表ハ同八年ノ數ニ係ル始メテ郵便ノ設
リシハ明治四年ニ在リト雖モ其六年以前ニ係
ルモノハ各其事ニ関カルモノ、不熟ニ坐シテ
計數詳ラカニスルコトヲ得ヘカラス

書留郵便并ニ無稅遞送ノ法ハ八年四月ニ創マ
ル故ニ八年表中載スル所皆周年ノ數ニアラス
又七年中東西兩京大坂神奈川兵庫長崎開拓使

ノ七所試ミニ此法ヲ施行スト雖モ亦管下一般
 ノモノニアラス右七年中書留郵便ノ數七所合
 シテ二十六万八千五百七十七無稅遞送ノ數十
 七万八千百〇九アリ
 沒書ハ其何ノ地ニ出ツルニ論ナク皆之ヲ東京
 ニ聚ノ再々配達返戻ヲ試ミテ后之ヲ沒收スル
 ヲ以テ縣ヲ分テ之ヲ舉クルヲ得ル其數明治七
 年ハ三千二百二十七同八年ハ四千九百五十五
 アリ

鐵道

第一表第三表ハ東京大坂兩鐵道開業ヨリ明治
 八年六月ニ至ルマテ其年度ヲ分テ毎ステロシ
 ヲン乗客及貨物運輸ノ數ヲ舉ケ第一號第四號
 ハ各ステロシヨシノ名ヲ省キ換フルニ毎一月
 ノ數ヲ以テシテ其終歲運輸ノ張弛耗息ヲ觀ル
 ニ便ニス 表中追徴ト書スルモノハ乗客下車ノ
 地ヲ誤マル者ニ徴シテ其運賃ノ不足
 ヲ償ハシムル
 ヲ云フナリ
 東京鐵道ノ乗客及其運輸賃 貨物運輸ノ賃ヲ每
 銀ヲ合算ス
 一月ニ平均スルニ初年ハ乗客ノ數六万千八百

二十一人運賃二万八百六十五圓六年ハ乗客十
一万九千八百六十八人運賃三万六千七百八十八
圓七年ハ乗客十三万二千二百四十四人運賃三
万六千八百二圓八年ハ乗客十四万八千九百八
十八人運賃三万六千三百九十六圓ナリ大坂錢
道ハ初年乗客六万三千六百六十八人運賃一万
七千四百三十二圓八年九万九千六百七十六人
運賃二万三千百十圓ナリ

東京ヨリ横濱ニ至ル錢道里程七里拾一町三拾
間四尺八六八大坂ヨリ神戸ニ至ル八里拾一町

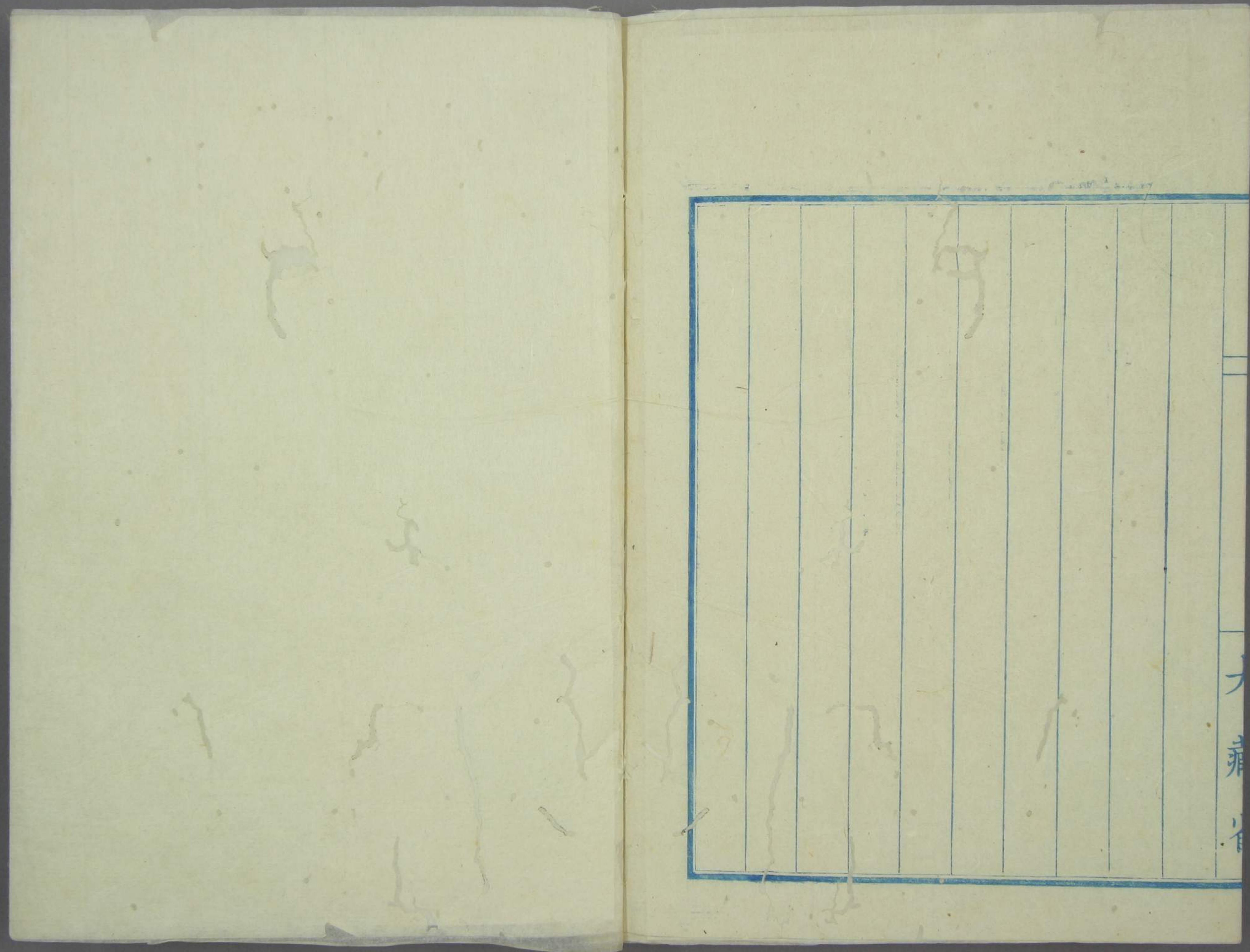
四拾五間。尺九二四ニシテ共ニ十五里二十三
町拾五間五尺七九二外ニ大坂ヨリ西京ニ至ル
建築未成拾壹里壹町五拾七間。尺七六八アリ
大坂神戸間錢道築費ハ未夕詳ラカラス東京
錢道著手ヨリ明治五年十一月ニ至ルマテ一切
經費百六拾四万五千五拾七圓八拾九錢三厘三毛

按スルニ六年以後錢道寮經費中年々尚建築費
ト称スルモノアリ然レモ其当初ノ築費ニ係ル
モノト後來新規ノ増築ニ係ルモノト經費分明
ナラス且ツ錢道寮ノ計筭皆本文ノ數ヲ以テ当
初ノ築費ト為スニ因リ今之ニ後又六年以後
年々ノ築費大抵十萬圓前後ニシテ之ヲ通算ス
ルモ多ク二百ニシテ前段擧クル所ノ里程ニ配
万圓ニ上ラス

スレハ一里ニ拾二万二百六圓ノ築費トス

明治八年一月ヨリ六月ニ至ルマテ全半歳間東
原横濱鐵道運賃收入ニ拾壹万八千三百七拾七
圓四拾三錢五ニシテ同年月間増築運輸一切諸
經費拾二万六千八百二圓七拾七錢八厘アリ此
收ハヨリ經費ヲ除キ残額九万五千五百七拾四圓
六拾五錢七厘ハ右半年間鐵道ノ純益ニシテ之
ヲ前文ノ建築費百六拾四万五千五百七拾九
錢三三ニ配スレハ資本百圓ニシテ七圓六拾二
錢七厘ニ当ル即チ一年一割五分四厘餘ノ利子

ナリ



大
省

